

「芳香」全号目次・著者索引を作り終えて

創薬科学研究教育センター・招聘(名誉)教授、薬学部同窓会長

松田 彰 (15期)

同窓会誌芳香第71号には、芳香 SCIENCE71 の少し科学的な記事も掲載されていますが如何でしたでしょうか。この号からそれらの記事は投稿されるとすぐに北大薬学部同窓会ホームページの「芳香 SCIENCE」中に掲載され、その後、冊子体で発行されます。したがって、時々ホームページを見ていただくと、原稿を投稿した時点から冊子体発行までのタイムラグがなく記事を読むことができることになりました。今後、「芳香 SCIENCE」だけでなく、「芳香 ESSAY」、「芳香 HISTORY」や「芳香 DATA」なども原稿を集めて同窓会のホームページに掲載する予定ですので皆様に喜んでいただけることを期待しております。

ところで、同窓会長になってから、芳香で同窓生の過去の記事を読む機会が増えました。しかし、例えば、既に3回投稿したと記事に書いてあっても、また、「芳香 HISTORY」に掲載できるような記事を探そうと思っても、60周年記念に作成されたCDから各号をいちいち開いて見て探さなければならず非常に不便でした。そこで、全号目次と著者索引を作成しようと思いましたが、他の皆さんは芳香71号の発行作業に多忙でしたので、小生が一人で作成することにしました。とは言っても、小生がコンピュータやソフトの使用に長けているわけでもないので、60周年記念のCD中のpdfを第1号から開いて、手入力ですべての情報をWordにタイプしました。この作業で目や肩がしんどくなりましたが1ヶ月ちょっとでできました。しかし、それらの中に間違いがないか、体裁を整えるにはどうするかなどがその後続き、一番大変だったのは著者索引の作成でした。23期の周東君たちが作成した同窓会名簿(2003年版)を頼りにしながら、全号目次の著者の後に卒業期をまず入力しましたが(卒業期が入っていない場合は教員を除いて不明者の場合が多い)、これがかなり大変で、特に女性(男性でも)で姓が変わっている場合が多く、名簿のあいさつお順の検索と、各期(ここにしか旧姓が示されていない)を行ったり来たりしながら探しました。さらに、ペンネームが多い号があり、それらの方々の卒業期が不明なので全号目次には「赤字」で示し、著者索引では最後に<所属不明者>として「赤字」で示してあります。それらについては、発行された号の編集者・編集委員長に連絡して本名探しをやりましたが、古い話なので記憶が不確かでした。このようにして作成した「全号目次」は2部に分けて(1号-25号と26号-71号)、また、「著者索引」(最初に教職員、その後、1期から順に、最後の方に大学院・研究生と不明者)と、原稿集めや広告集めに苦労した編集委員に敬意を表して作成した「芳香の発行年と編集委員」を同窓会ホームページの「目次」のボックスに入れましたのでどうぞご覧下さい。今後、大学院から入学された方の卒業期を入れる予定です。また、各記事が掲載されているページ数は要望があれば入れる事を考えます。

<お願い>

- 1) どんな細かい間違いでも結構ですので見つけたら知らせてください。
- 2) ペンネーム(赤字)に対する本名と卒業期がお分かりの方(本人でも)は、それらに本名を付けて公表しても良いかを添えて知らせてください。

連絡先:matuda@pharm.hokudai.ac.jp

さて、芳香は学生自治会の雑誌(機関誌)として年2回発行されました。第1号(1956年7月発行)から第25号(1969年5月発行)までです。第1号から5号まではガリ版印刷で、第6号から活字

印刷(縦書き)になります。その後、第 26 号(1970 年 3 月発行)から年1回発行になり、第 34 号から横書きになり現在に続いています。計算しても発行年と号数とは合いませんが、それは「芳香の発行年と編集委員」をご覧ください。理由が分かります。

小生は15期生ですが、我々の期は芳香が発行できませんでした。同期生の名誉のために一言弁解します。あの頃は、2年生後期に学部移行しました。しかし、丁度2年生の4月、授業開始日に教養部の建物がヘルメットをかぶり、角材をもった学生達に封鎖されてしまいました。それから初冬にかけて長期間、教養部だけでなく文系校舎、図書館なども封鎖されました。たまたに理学部で生物の講義がありましたが、ほとんどやらずじまいで、学生全員、多分単位不足で学部移行ができませんでした。翌年の3年生の4月から金網に建物が覆われた薬学部に移行しましたが、講義も学生実習も1年半(2年生後期分+3年生分)の量を1年に縮めてぎゅうぎゅう詰めで行い、しかも、教養の語学(小生は英語は米光先生、ドイツ語は伴先生に習いました)の講義もあり、体育は体育館に行っても不足分をやらねばならず、本当に空き時間が無い状態でしたので芳香編集には手が回らなかったのだと思います。

ところで、医学部薬学科時代の教員は非常によく学生達に接していたことが芳香の記事から推測できます。頼まれた記事を書くばかりでなく、座談会への参加、創作や社会活動など、さらには<学芸>と称してその当時の科学の最先端を記述しています。また、若い教員が多かったせい、北大に赴任してから外国に留学する方々が多かったのも特徴でしょうか。留学先からの手紙が数多く掲載され、最先端の科学に接することもできたと思います。また、他学部の教員にも幾つか記事を書いてもらっています。最近の教員は昔とは異なる忙しさに忙殺されているようですが、もう少し学生との接触の機会を増やせないかなと自分のことを棚に上げて思っています。徐々に卒業生が増えるに従って、<同窓生便り>の欄ができましたが、最初はそれほど多くの同窓生が投稿してくれたわけではありませんし、途中でこの欄が消滅もしています。第 38 号(1989 年)位から少しずつ増え、第 46 号(1997 年)から急激に増えて、現状ではほとんど同窓会会員の紙面上での交流の場になっています。

このような全号目次や著者索引ができると、各期同窓生の芳香への執筆率を簡単に計算できます。ペンネームで書かれた方がどの期に属するかが不明なために、正確な数字はできませんが、やはり、一学年 40 名のクラス期の方が執筆率は高いようです(グラフ参照)。これはほんの一例ですが、全号目次と著者検索を使って更に楽しんでいただけると幸いです。

各期同窓生の執筆率(%)

